

# 病理部

## 教授（部長）

深山正久\*

## 准教授

柴原純二\*（副部長）、石川俊平\*

## 講師

高澤豊（病理部）

## 病院講師

牛久哲男（病理部、米国留学）

## 助教

森川鉄平、池村雅子、前田大地、松坂恵介（病理部）

日野るみ\*、新谷裕加子\*、田中麻里子\*、篠崎綾\*（米国留学）

## 医員

西東瑠璃、細井敦子

ホームページ <http://pathol.umin.ac.jp/>

## 沿革と組織の概要

病院病理部と病因病理学専攻人体病理学・病理診断学分野（\*）は、一つのユニットとして機能し、東大病院の病理診断業務（剖検・病理診断）と、人体病理の教育、研究に当たっている。

平成 24 年度の病理部固有のスタッフ構成は、講師 1 名、助教 4 名、医員 2 名であった。

遠隔病理診断・地域連携を推進するため、全学の「教員再配置」で要望した教員スタッフの増員が、1 名分ではあるが、認められた。来年度より遠隔病理診断・地域連携推進室を設け、横浜市立大学医療センター佐々木毅准教授を室長（准教授）として招聘する予定である。

## 診療（病理診断・剖検）

平成 24 年度は、組織 15,931（検体数 21,813）件、細胞診 19,244 件、迅速診断 695 件、迅速細

胞診 553 件、院内剖検 52 例（剖検率 15.5%）、受託剖検 2 例であった。

例年通り、剖検症例に関する検討会（病院 CPC）を病院において毎月 1 回行い、毎回 2 症例について検討している。手術症例については、以下のカンファランスを行っている（カッコ内は責任スタッフ名）。呼吸器外科（森川助教）、肝臓・胆膵（柴原准教授、田中助教）、泌尿器（森川助教）、婦人科（前田助教、高澤講師）、乳腺（池村助教）、整形外科（前田助教）。生検について臨床各科と定期的にカンファランスを行っている臓器は、腎臓（新谷助教）、皮膚（高澤講師）、消化管（松坂助教）である。

我々の業務上の目標は、正確な診断を可能な限り早く臨床に提供することであり、迅速組織標本作製装置を用い、one-day pathology を実現するべく、検討を重ねている。また、報告書、スライ

ドのレビューを全例について行っており、確実な診断を保証するため、継続的に努力している。

バーチャルスライド・スキャナーを導入し、すべての生検標本をデジタル情報として保存している。今後、病理画像を院内に広く提供することを目指している。

厚生労働省「診療行為に関連した死亡の調査分析モデル事業」への協力を継続している。

## 教 育

M2を対象に系統病理学講義、実習を行っている。ベッドサイドラーニング (BSL) はM4を対象に行っている。クリニカル・クラークシップでは、2名の学生を受け入れた。

卒後臨床研修制度で各研修医に義務付けられているCPCレポートの指導を行った。平成22年度からCPCダイジェストを院内に公開すると共に、臨床研修医が自ら問題を解決して、CPCの内容を理解できるよう、CPC e-learningを作成した (高澤講師、池村助教)。

また、研修二年目のプログラムとして、平成24年度には10名の研修医 (延べ25ヶ月) を病理部に受け入れた。

## 研 究

富士ゼロックス・産業技術総合研究所等とこれまで共同研究を行ってきた (「自然言語処理とオントロジーに基づく自由テキスト入力支援の医療文書への応用」)。その一部が、科学技術機構「研究成果最適展開支援プログラム ハイリスク挑戦タイプ」(A-STEP) 平成23年度採択課題となっている。

高澤講師を中心に、死後CT画像の病理解剖を補助する手段としての有用性に関する研究を継続しており、オートプシー補助CT室に設置したCT装置を用い、死後画像と病理解剖結果との対比し検討を行っている。

さらに、手術症例に関するカンファランスを基に、腫瘍性疾患の概念整理、病理形態学的解析に取り組んでいる。また、東京大学先端科学技術研究所ゲノムサイエンス部門、上部消化管外科と共同で、癌特異抗体を用いた新たな診断、治療方法の開発に取り組んでいる。胃癌のセンチネルリンパ節への転移を漏れなく検出する目的で、原発巣、転移巣についての組織マイクロアレイを構築し、最適の抗体を選ぶため検討を進める一方、PET、in vivo imaging などを取り入れた技術開発にも協力している (松坂助教)。

## 出版物等

人体病理学・病理診断学分野の該当項参照。